

《原 著》

FDG-PET がん検診の実態と成績 全国調査に基づく検討

南本 亮吾^{*1} 千田 道雄^{*2} 宇野 公一^{*3} 陣之内正史^{*4}
飯沼 武^{*5} 伊藤 健吾^{*6} 奥山 智緒^{*7} 小口 和浩^{*8}
川本 雅美^{*9} 鈴木 豊^{*10} 塚本江利子^{*11} 寺内 隆司^{*12}
中島 留美^{*13} 西尾 正美^{*14} 西澤 貞彦^{*15} 福田 寛^{*16}
吉田 毅^{*17} 井上登美夫^{*1}

要旨 2005 年度に、¹⁸F-fluorodeoxyglucose-positron emission tomography (FDG-PET) がん検診〔FDG-PET (PET/CT を含む) による健常者を対象とするがんのスクリーニング検査、他の検査を併用する場合を含む〕を施行した 46 施設、受診件数 50,558 件について検討した。総合判定での要精査例 (受診者の 9.8%) は可及的精査結果の提出を求め、精査結果の回答が不十分であった 8 施設を除く 38 施設、受診件数 43,996 件につき詳細な解析を行った。受診者の年代分布は 50,60 代に多く、全体の約 61% を占めていた。がんの発見は合計 500 件で受診者の 1.14% (FDG-PET 所見陽性 0.90%, 陰性 0.24%)、発見されたがんのうち FDG-PET 所見陽性は 79.0% であった。発見例の多かったがんの種別と PET 陽性率 (感度) は、併用検査項目に依存するが、実態としては、PET 感度の高いものでは甲状腺癌 (発見 107 件、PET 感度 88%)、大腸癌 (102 件、90%)、肺癌 (79 件、80%)、乳癌 (35 件、92%)、PET 感度の低いものでは前立腺癌 (47 件、45%)、胃癌 (30 件、30%) があげられた。また PET の陽性適中率は 29.0% であった。PET 専用機と PET/CT 装置では、要精査率は PET/CT の方が高かったが ($p < 0.01$)、発見率、感度、陽性適中率は PET/CT が勝っていた ($p < 0.01$)。

(核医学 44: 105–124, 2007)